

# 奄美大島龍郷村の村落構造

——既存宗教との関連を中心にして——

中 間 美 美 子

種子島から八重山諸島の西表島に至るまで弧状に数多く並ぶ南西諸島は、今日多分野にわたって重要視されている地域である。これらの地域の歴史性に注目し、一応私も、①日本の文化とは何かという事に関して、南西諸島の位置や特殊的文化を通してそれを探すこと、②①に関連して地域社会と個人とのかかわりかた、つまり共同体と個の問題を探り出すこと、等の大まかな問題意識を持ち続けているが、これけもとより非常に大きな問題であり、地理学のみならず多様な視角からの探求が必要なのであり、今の私の力に負えるものではない。しかし、それらの問題を解決すべく種々のアプローチの第一歩として、今回奄美本島龍郷村を地域として選択し、既存宗教との関係を中心にしながら村落構造をみてゆくことにした。龍郷村をフィールドとして選んだのは、①龍郷村の村落は、山地が多い地形のためほとんど海に面した狭い沖積平野に位置し、各々20戸～180戸位までの小さな集落であるにもかかわらず、古くから独立的性格が強く小山を隔てた隣部落とは言語のアクセントまで違うという隔絶性を示している。その中で主として経済生活の面における本土化（それは景観にもあらわれつつある）が進みつつあるという状況があること、②他面において明治・大正はおろか戦後のつい最近に至るまで古代に発生した神道であるノロ（女性神官）を中心とする村落的祭祀共同体の性格がかなり残存していたという特殊な地域であるという理由からである。島津藩のノロ信仰弾圧、仏教のおしつけ、明治以降のキリスト教の布教、新興宗教の進出と複雑化してはいるが、これらの要因が伝統的社会慣習となって変形しつつあるものの、まだ生活の中に生きつづけていることは明らかである。そこで実際どのように村落の構造にあらわれているか、かつ経済面での本土化現象が徐々に進みつつある今日、特に②のことがどのような関係にあるのかということ、つまり、文化の変容の様子について少しでも把握できればと思っている。しかし奄美の中で地域が非常に狭い範囲に限られていること、方法的にも未塾であるということも前提の上で、まず第一歩をふみ出したという次第である。なお紙面の都合上地名、ノロ、全体のまとめに限って述べることにする。



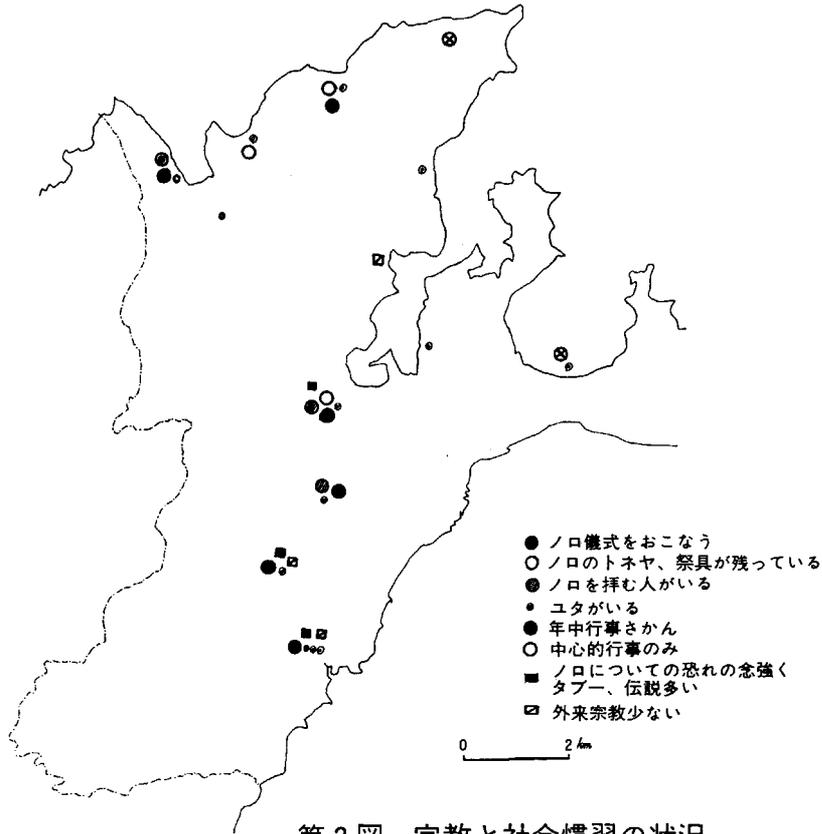
味で、ほとんど海岸付近にある。水田が広がっているのが普通であるが、ボーリングしてみると浜砂が発見出来、三角州や白砂の堆積地と考えられる。生産用具の進歩、水田耕作技術の向上と共に水田耕作地も広がり、それと共に集落がこの金久地域へ移動したものである。奄美の村落は海に面した所にあるためか金久という地名(人名にも金久がみうけられる)が多い。他に畑地にはハル(原)、川にはホーラ、ジョー、田には袋の地名が目立つ。もう一つ重要な地名は「グスク」(城)である。このグスクに関しては考古学的な研究も進み、発生に関しては諸説があるのだが、大体次の三つに分類されている。

A. 按司と呼ばれた支配者の居城。B. 発生、興亡すら文献上、口碑上よりも不明な点の多い野面積の石垣遺構をもつもので、このグスクに関して(1)原始社会の終末期より古代社会に移行する時期頃の、防禦された、又は自衛意識をもって形成された集落説<sup>2)</sup>と、(2)神の居所として清められた骨すなわち骨神のいる場所とする聖域説<sup>3)</sup>とに分かれる。C. 特殊グスク(シ)ク。

龍郷村に関して、いずれのグスクにあてはまるか考古学的方法もとり入れた研究を行えば一段と興味深いと思われるが今後の研究を待ちたい。ただ秋名にはAのグスクが存在していたようであるが発生の時期などは明らかでない。

## ノロ祭祀制度とその残存性

南西諸島の伝統的宗教にアニミズムにはじまる古神道としてのノロ神信仰がある。ノロ(祝女、巫)の出自は非常に古く、島立て、村立ての頃に始まると考えられているが、歴史を経るにつれて変化し、複雑化し、後に作爲的な面もあらわれてきたのではっきりした原型は明らかでない。一口で言えば開拓祖神崇拜ということであろうが、古神道の根本思想は“天上に太陽を主とする幾多の神々があって各々の任務を持ち、地上のあらゆるものを守護しているように、現世にもノロを中心とした神の世界がある。天上と異なる点は地上の神には守護の能力がなく、神への奏上によってその守護を受けることが出来る。従って御取次が現世の神々の任務になっていてその任務を持っているのがノロである<sup>4)</sup>”という考え方である。村落の草分け(総本家筋)の娘が最高司祭者となって御嶽<sup>5)</sup>(聖なる杜)を中心とする村落の祭祀共同体が成立し、あらゆる祭りの指揮をとっていた。共同体の政治上の実権はノロの血縁の男が握り、祭政一致の運営がなされていた。琉球王統一(1429)後は、琉球王は政治上の中央集権をやがて宗教界にも及ぼし、ノロの最高の地位に開得大君という司祭者をすえ、各間切<sup>6)</sup>にはそれまで自然発生的に存在していたノロを、辞命を発するという事によって統率し、政治的にも宗教的にも強固に支配してゆくこととなった。神官としての辞命を受けるようになってからは、神の使者としての性格は薄らぎ、政治上の助言者としての資格



第2図 宗教と社会慣習の状況

も失われたので、単なる祭祀者としてその余命を保つのみとなったのであるが、従来の慣習上、信仰の中心となって尊敬の念がまだ村人の生活の中には生きついでいくのである。この変化期を宗教改革と呼ぶ人もいる。1624年島津が禁止し弾圧してからはまた秘かに民間宗教の中に帰ってゆき、現在まさにホソボソと老女のみが拝んでいる状態であるが、年中行事をはじめ社会慣習の中に継承されている部分が大いにあると思われる。ノロ時代における村落の構成は大ざっぱにいて次のようになっていた。丘陵の中腹か頂上に御嶽（神の杜）があり、その下に神アシアゲ（祭礼の日にはノロをはじめ神人が集って公式の行事を行う場所）、その右側に神の殿（祭壇を設けた殿でノロ自身が直接祭祀を行う場所）があり、同線上にトネヤ（ノロの住居）が杜に対して平行に並んでいる。段を下げて村屋（部落の政治機関）、ミヤ（広場）がある。杜へ通じる神の道、神と交わりのため身を清める神川（クンギョ）があり、これらの杜・川・道は特別のものとされ、一般の人には恐れられ、最近に至るまで神の杜の木の伐採や開拓、道路の整備等に支障をきたしていたという。

ノロの組織は、親ノロ1名、ウッカム<sup>7)</sup>3名、ウキチガン<sup>8)</sup>グヂヌシ<sup>9)</sup>4名で、祭の世話 トネヤ、祭具の管理が行われていた。ノロの所有地としてテヂリ畑、テヂリ田があり、グヂヌシが耕作し、祭の供え物やノロの賄に用いた。農耕儀礼や祖先崇拜と密接に結合した年中行事の指揮や新築、新造船の魔よけをするのが形式化したノロの仕事となった。ノロの継承は同一氏族の中から容姿端麗な、神がかりになりやすい娘が選ばれ終身職であった(正式には兄弟系統の姉妹が継ぐものとされ、その順序はひどく複雑である)。

ノロの発生<sup>10)</sup>、現在の存在のしかた、氏族組織・社会組織等を調査した先島や八重山群島の文献を参考にして、奄美と比べられる範囲で検討した結果、奄美の場合、氏族組織(沖縄でいうところの<sup>モチウ</sup>門中組織)がそんなに強く残存していないことから、いわゆる祖先崇拜と共同体の信仰の行事と、本土からの仏教等の行事とが混合され(しかしこれは本土の方が変形していったことも考えられる)、非常にあいまいであるように思われた。もう一つ、ユタの事について記さねばならない。女性神役ノロが政治的に弾圧を受けたため、公の神役から民間の呪術を行なうようになったユタやホゾンガナシが人々の中に侵透していった。もともとノロもユタも公の祭祀を行なう神役と、その霊力を使って人々の病気や災難を防ぐ、いわゆる私的巫女としての相違であって、本来は霊力を持つ女性としては同一のものであったと考えられる。一方は役職としてノロになり、他方は呪力を持つ呪術者となったものと考えられる<sup>11)</sup>(ノロの祭りにも参加するが下の方に坐る)。ユタの日常行事は易占、運勢占、マブリ付<sup>12)</sup>、マブリ分かし<sup>13)</sup>である。

### 竜郷村部落別宗教状況

1945.9現在

部落名 (人口)	ノロとユタ	残存しているもの	その他	宗教人口	教会の有無
秋名 (565)	ノロあり	トネヤ、祭具。稲魂招きの祭礼、しちやがま祭、平瀬祭...昔の儀式に基づく。	厳島神社	キリスト教(30) 天理教(9) 創価学会(50) 神道(60)	○
幾里 (417)	ノロなし (30年前頃まで) ユタ 1			キリスト教(10) 天理教(10) 創価学会(20)	○
嘉渡 (450)	ノロなし (1年前) ユタ 1	刀、サロシ、トネヤ		キリスト教(50) 天理教(0) 創価学会(1) 神道(1)	○

龍郷村部落別宗教状況(つづき)

部落名 (人口)	ノロとユタ	残存しているもの	その他	宗教人口	教会の有無
円 (563)	ノロなし (3年前)	白衣(サロシ), テロ ギ(扇) ハプロ玉, トネヤ, 神 の道。昭和35年まで ノロの勢力大		キリスト教(1) 天理教(1) 創価学会(13) 神道(1)	×
安木屋場 (318)	なし		今井権現	キリスト教(20) 他なし	○
竜郷 (412)	ノロなし (10年前)		高千穂 神社, 弁財天	キリスト教(20) 天理教(10) 創価学会(25)	○
久場 (130)	ノロなし (60年位前)			創価学会(3)	×
瀬留 (304)	ノロなし (60年位前)			キリスト教(13) 創価学会(5)	○
屋入 (106)	ノロなし ユタ1			キリスト教(4) 創価学会(2)	×
浦 (465)	ノロ3 ユタ1	トネヤ, 祭具, ノロの 墓(石管)・・・ノロ の家族3人拝む。伝説, タブー多い。		キリスト教(7) 天理教(8) 創価学会(12)	×
大勝 (710)	ノロ1 ユタ1	浦のノロと関係あり	高千穂 神社	キリスト教(10) 天理教(10) 創価学会(13) 神道(4) 仏教(10)	○
川内 (192)	ノロなし (40~50年前) ユタ1			キリスト教(2) 創価学会(10)	×
中勝 (268)	ノロなし ユタ1	ノロについての恐れ の念大きい。たぐさんの 伝説。タブーが実際の 場所, 事物にまつわり ついて存在。		キリスト教(2) 創価学会(2)	×
戸口 (845)	ノロなし ユタ3		行盛神社 厳島神社	キリスト教(6) 創価学会(9)	×
赤尾木 (620)	ノロなし ユタ1			キリスト教(20) 天理教(5) 創価学会(7)	○

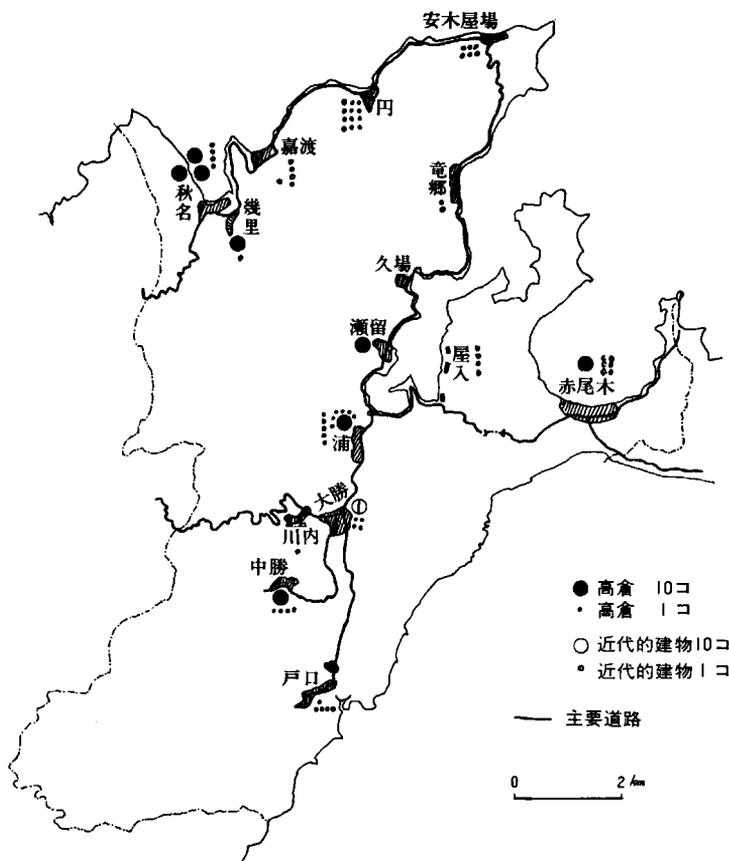
さて以上の信仰の残存度を龍郷村で調べてみると表のごとくになる。ノロを拝む人がいる部落は現在3つあるが、浦と大勝では昔からノロの血統をひく家族が個人的に拜んでいる程度である。しかし浦にはトネヤ、祭具が残っている。ノロに対する部落民の態度は伝説と共に老人達の中に生きており、一見恐れられているようであった。またこの部落にはめずらしいノロの石管が残っている。ノロが死んだ時は特別に改葬もなされず、皆近寄れなかつたという。次に秋名のノロについてであるが、この場合ノロそのものの血統は絶えてしまったがノロの兄弟の一族がトネヤや祭具を保存している。ところで現在村全体で稲魂招きの祭礼、しちがま(アラセツ)祭、平瀬祭が昔の儀式に基づいて、祭日に行われているが、これは多分に老人層が昔の信仰を残すために、文化財保護の立場から維持されている。その他注目すべきものは、嘉渡と円のノロについてである。嘉渡には昭和44年までノロが生存していたが、その後絶えてトネヤのみ残っている。この場合キリスト教徒が多いためか、生存中も特別に村全体で行事を行なう事はなかつたらしい。円部落のノロは昭和42年に死に絶えた。しかし昭和35年頃までは中心になってきちんと行事を行ない勢をふるっていたらしい。現在トネヤは祭壇を作ったまま残っているし、ノロの衣装や祭具は遠縁にあたる人が大切に保存している。それらを見せてくれた人自身も何かたたりがあるのではないかと少々気味悪がっていた。またこの部落には神の道、ミヤゲも残っている。1970年9月現在の各部落の大体の宗教人口は表のごとくである。ここに明記されていない分は宗教がはっきりしていないとみてよい。一応神道に組みこまれているらしいのだが、今日のこの神道がどうもあいまいで、島津が本土からノロの代りに持ち込んで布教した巖島神社系と、平家落武者の伝説をひく行盛神社系とが代表的なものである。その系統の熱心な信者は明記したもののみであると思われる。奄美の場合特に寺と神社とが区別出来なくて近年になってやたらと本土の神社を持ち込む傾向にあるようだが(本土化現象の一つ)、神道の原型、及び天皇制度の原型がノロではなかつたらうかと問われている今日、誠に皮肉な現象と言えるのではなからうか。

さて古神道の制度は何らかの形で社会慣習の中に生きているが、ここで年中行事<sup>14)</sup>に触れてみる。元旦、七草粥、小正月、山の神の祭女の節句、アジナネ(4月初己日)、浜オレ(4月の寅又は申)、男の節句、七夕祭、盆、アラセツ(8月初の乙丙の日。正月と匹敵する位の行事。農作物の豊作と地火、水子の神を信仰。乙の日にミキを作り、2日間八月踊で豊年を祝う)、シバサン(アラセツの乙の日から7日目の王の日、天地の神に水害のないよう祈る<sup>15)</sup>)、ドゥンガ(甲子の日、男女享樂の8月踊をおどり休息の最後の日とされる)、浜シュガン(9月9日)、十五夜(収穫祭。部落創始神の祭日)、タネおろし、敬老の日(この地方の祖先崇拜と相まって今日盛大におこなわれる)、以上が奄美の龍郷村でおこなわれている年中行事である。その他、年令集団、共同

作業、改葬、婚姻、等に特殊性があらわれている。

### 竜郷村のまとめ

(1) 龍郷村の経済を支えているのは、平均で田0.18ha、畑0.3haという非常に狭い耕地面積にたよっている農業と近年急速に上昇している紬織業である。なかでも紬織業の占める割合は相当なもので、全龍郷村人口の70%にも及ぶ現状である。龍郷部落より北は紬が主体で、それより南は耕地面積がいくぶん多いためかさとうきびも重要な収入源となっている。又最近、南の大勝赤尾木の各部落では園芸農業が新しく導入されている。(2) どの部落においても人口減少が著しいのが普通であるが、紬の高収入のため、部落によっては増加現象も徐々にみられ、特に女の人の多いのが目だつ。出かせぎ先は鹿児島、阪神方面が多い。(3) 村落の景観をみると、全体的には伝統的の家屋、高倉、鹿児島的の家屋と、近代的建物との混合現象を示しつつある。高倉や茅葺屋根の多い



第3図 高倉の残存と近代的建物の進出

部落にはいわゆる本土的建物は少ないがその逆のことは必ずしも言えない。しかし安木屋場は紬業者が多いという経済的基盤と関係して、茅葺や高倉は1つも残っていない唯一の部落である。(4) 商業面をみると、各部落にはよろずやの店が2・3軒あるのみで、種々の買物は名瀬から定期的に回ってくる走るスーパー(バス)にたよっている。消費者協同組合は全然ない。しかし、交通の要地に位置する大勝、浦、赤尾木には10～15軒の商店が並び、その種類も美容院、タクシー、衣料品店といくぶん多様化している。特に大勝は龍郷村における商業の中心地である。(5) 古神道としてのノロ信仰は、現在本来の形としては消えているが、速くて50年位前、近くて10年位前までは、実際村落運営の中や年中行事の中に生きており、村人の生活や精神面に何らかの影響を及ぼしていたことは確かである。今日秋名でのみ儀式を行っているが大部分変形している。しかし全部落において村運営の重要な位置を占める年中行事の中には古神道系のもものが相当多く残存し、熱心にとりおこなわれているし、タブーとか伝説とかが実際の場所と共に残っており、老人層に特におそれられている事実は疑いえない。(6) キリスト教をはじめ、外来宗教が侵入しているが、そのため村落の社会慣習が著しく変化している現象はない。

信仰をはじめ、伝統的社会慣習は農業との関係から生まれてきたものであると考えられるが、農業が徐々に少なくなってきつつある現在、又は将来において、これらのものが形式化してゆくことは確かである。しかし経済面での変化に比べて遅々としている事は明らかであるし、また全然変化しないで強固に残る部分も必ずあらわれられると思われる。その部分の解明がなされうるならば、今日残されている多くの問題、大きく言えば人間と社会との問題に何らかの示唆を与えることができよう。

(大学院第4回生)

— 註 —

- 1) 柏常秋氏の南島風土記より。キナ、ケナ、キナワは同系統であり、大字名で沖繩に32、奄美に19、小字名では奄美に150もある。主作物は粟で粟の穀霊信仰で判明できる。
- 2) 嵩元政秀説。
- 3) 仲松彌秀説。「死んだ人は神となるという古代信仰からするならば祖先達の葬所や墓がウガンウガ(ウガ 拝み)となり、その森が御嶽となることは自然の成りゆきであろう。ただし、その村落にウガン即ち御嶽が発生した後においても新しく共同葬所を設けなければいけない。この新しい葬所も等しく神の居所として、グスクと称した村もあったはずである。」しかしこの墓は二次、三次的な洗骨がなされた収骨所といういみである。
- 4) 島袋源七(1950): 沖繩の民俗と信仰, 民族学研究, 15—2
- 5) 奄美では御嶽(ウガン, ウタキ)という言葉は耳にしなかった。神の杜と称していたようだ。
- 6) 琉球王の支配区分。奄美もいくつかの間切に区分統治されていた。
- 7) 補佐役

- 8) 掟神, 世話役。
- 9) 男の役目。
- 10) ノロ自身が自ら先のノロから伝承してきたものを, 他人には口をとざして語らないので, なかなか困難である場合が多い。
- 11) 「薩南諸島の総合調査(民俗編)」より。
- 12) 長病とか熱病人の熱が下がらない時マブリ(魂)が抜けているというのでマブリ付けをする。
- 13) 死んだ人が49日たったとき, 魂とお別れをするためユタを通して死者が言い残したことをきく。
- 14) 行事の説明は古神道に関係ある以外は省略。元旦以外はすべて旧暦。
- 15) シバサシから5日目は一年中で改葬に一番日柄のよい日とされる。

## 参 考 文 献

- 東恩納 寛 悖(1940):南島風土記
- 平 山 輝 男(1969):薩南諸島の総合的研究
- 島 袋 源 七(1950):沖縄の信仰と民俗, 民族学研究, 15-2
- 伊 藤 幹 治(1962):八重山群島における兄弟姉妹を中心とした親族関係, 民族学研究  
27-1
- (1964):八重山・西表島の親族関係と祭団の構造と変化,  
都立大編「沖縄の宗教と民族」所収
- 金 久 好(1963):奄美大島における「家人」の研究
- 小 野 重 朗(1969):加計呂麻の民俗
- 千 葉 徳 爾(1969):民俗と地域形成
- 大 阪 市 大(1963):八重山群島学術調査報告
- 日本庶民生活史料編成, 第一巻, 1970
- 名瀬市誌, 1968
- 大 熊 誌 1969
- 鹿児島県史 1963